

はじめに

語句整序問題という形式は、英文を構成する力を問うものとして出題されると思われるが、受験生にとっては対策の立てにくい形式の1つである。日本語が与えられている場合はそうでもないが、日本語が与えられていない場合は、どういう意味の英文にすればよいのか見当がつかないことがよくある。この形式が苦手な受験生が少なくないのもむりからぬことである。名詞しかないと思っていた語が、実は動詞でも使われることがあるとか、あるいは、たとえば cost のように現在形も過去形・過去分詞形も形が変わらない上に、名詞でも同じ形で使われるなどのことを確実にわかっていると正解を導くのに苦勞する。

苦手意識を克服し、抜けていた知識を身に付ける最善の方法は、300～400題程度の問題を解いて、形式に慣れることである。そしてそれと同時に、この独特の出題形式の問題を解くことによって、他の問題形式では見逃されがちなポイント、特に語順や文の構造などを確実に身につけることである。そこで本書を編むのに際しては、学習効果を最大限に期待できる問題を精選することと、解説とポイントをできるだけ分かりやすく記述することを心がけた。それゆえ、本書を十分やりこなせば語句整序問題対策はかなりできたことになるはずである。

また、【解答・解説編】の巻末に、最低限必要な文法の **ルール** をまとめてある。わずかな量なのですべてに簡単に目を通せるはずである。ざっと見直すだけでもかなり役立つであろう。

諸君の健闘を祈る。

2020年3月吉日

編者記す

目次

第1章	選択肢にいくつかの品詞として使える、同じ綴りの単語がある場合	5
第2章	文法的にはいいが、意味的にまずい場合、あるいはその逆の場合	11
第3章	関係詞、接続詞、前置詞など、語句と語句あるいは節と節などをつなぐ語(句)が選択肢にある場合	17
第4章	節と節などをつなぐ語(句)が選択肢にない場合	27
第5章	語順が通常の語順と異なっていたり、特殊な語順にしなければならない場合	35
第6章	何かと何かを比べる場合、あるいは比較の表現が含まれる場合	41
第7章	語句整序問題ではどういう問題が難問になるのか、難問ばかりを集めた場合	47
第8章	have, make, get, let などの基本動詞が選択肢にある場合	53
第9章	to V, V-ing, V-ed を文中でどう使うべきか判断しなければならない場合	59
第10章	it, them を初めとした代名詞が選択肢にある場合	73

第1章 選択肢にいくつかの品詞として使える、 同じ綴りの単語がある場合

— 動詞として使うべきか、名詞として使うべきか、その他の品詞として使うべきか
などを考えなければならない場合 —

第1問

問1 1 ① 2 ⑤

They are both good universities, so it's up to you to decide which offer to
 ② ① ④ ⑤ ③
 accept.

2つともよい大学なので、どちらの申し出を受けるかを決めるかはあなた次第だ。

POINT1 offer は、動詞としても名詞としても用いることができる。ここでは、名詞として使わなければならない。accept this offer ならば、「この申し出を受ける」となる。accept that offer ならば「あの申し出を受ける」となる。また、the offer to accept (to accept が直前の名詞 offer を修飾する形容詞的な用法) ならば、「受けるべき(その)申し出」となる。したがって、which offer to accept は、「どちらの申し出を受けるべきか」という意味になる。

下のように、言い換えることもできる。

decide which offer to accept

=decide which offer you should accept

POINT2 accept O で「Oを受け入れる」という意味で、下のように使う。

例 I knew that they would **accept my proposal**.

「彼らは私の提案を受けてくれるものと私は確信していた。」(ここでの knew は felt sure に近い意味である)

POINT3 decide の目的語の役目をしているのが which offer to accept 全体である。

POINT4 It is up to O to V という形で、「～するのはO次第である」(It は、to V 以下を指す仮主語〔形式主語〕である。be up to O で「O次第である」という意味)

問2 3 ② 4 ③

One must practice every day in order to become a world class athlete.
 ⑤ ② ① ③ ④

国際レベルの運動選手になるためには、毎日練習しなければならない。

POINT1 practice は、名詞としても動詞としても使える。本問では、動詞として用い、「練習する」という意味になるようにすればよい。